滋賀文化財だより

NO. 254
1999. 7. 1

●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

254. 瀬田川のアユカケ　1
―船を用いた友釣りの用具と技法―

今、日本の釣り人口は一千万人とも二千万人ともいわれ、およそ水のあるところに竿有り、竿の元に人有りといった状況である。

数有る釣りの中でも、川のアユ釣りには、魚の味覚もさることながら、オトリを用いて魚を釣るという日本独特の釣法とあいまって熱狂的なファンが多い。

アユの友釣りは広く知られているように、川の中流域で定着生活を送るようになったアユが、餌である硅藻、藍藻等の付着性藻類を独占せんがため縄張りをつくり、その縄張り内に侵入する他のアユを体当たりで撃退する習性を利用したもので、その初現は不明であるが、江戸時代の中期にはすでに行われていた。

友釣りが昭和中期以降、遊漁として一般に定着してからは、釣果のほかに釣趣を求めて、用具や釣法が飛躍的な発展を遂げた。その一方、職漁としての友釣りも近年まで行われていた。

今回紹介するのは、瀬田川（大津市関津（せきのつ））で行われていた、船を用いる「アユカケ」と呼ばれる友釣りの用具と技法である。

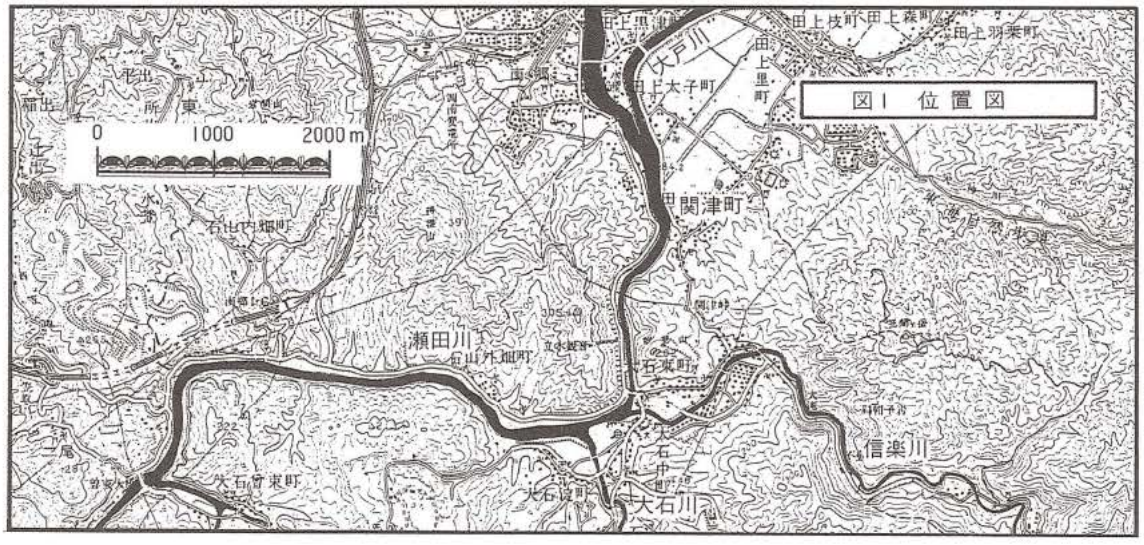
大津市関津は、南郷洗堰の下流約１ｋｍに所在する集落で、琵琶湖を利用した水運の最終地点として、また、ウナギ梁に代表される独特の漁法を駆使する漁労の集落として発展してきた。

ここで紹介する船を用いたアユカケは、関津で四代に渡り漁業を営んできた上野喜八氏(昭和６年生まれ)からの教示によるものである。

アユカケ漁を最も盛んに行っていたのは昭和25年前後で、その後、昭和37年頃に養殖アユが市場に出回るようになり職漁としてのアユカケ漁は成り立たなくなった。その後、「養殖は不味いので天然アユを」という需要もあったが、その頃には漁に見合うだけのアユがいなくなっていた。

アユカケ漁の最盛期の頃のアユの値段は、大アユ１匹が120円ほどもした。大工の１日の手間賃が450円ぐ

写真１　漁場環境



らいの時代のことである。この頃漁期の約２カ月間で１年の喰扶持が稼げるほどであったという。

１．アユカケの仕掛

現在のアユの友釣りの仕掛は、金より高価な極細のメタルラインや、高密度ポリエチレンライン等に代表されるハイテク素材をふんだんに用いたものとなっているが、これはあくまでも遊漁のための仕掛であり、１匹のアユを釣り上げる過程の楽しみのために採用された仕掛である。しかし、職漁としての友釣りとなると採算性が重要な問題となり、これが自ずから仕掛に反映されることになる。

これから紹介する仕掛は、昭和20年代頃に用いられていた職漁としての友釣りのものである。

①　竿（図－２）

素材はシノベ（矢竹）もしくは、マタケ（真竹）の細いものを用いる。全長は6.7m程で、２本継ぎにして用いる。手元の竿をシリツギと言い、1.5mほどの長さをとる。

穂先（竿先）には図のように補強のため紐を巻き付け、その先端を5.5cm程垂らしチチクビとし、これに道糸のチチワを着ける。

竿は、ほとんど自然竹のままで、製作には特段複雑な工程があるわけではなく、竹の大きな曲がりを矯正する程度である。従って、竿は消耗品的な感覚で扱われ、１本の竿がひと夏持てば良いと言った感じである。特に良くできた竿でもふた夏しか使えなかった。

この様にして造った竿は、現代のカーボンロッド等のハイテク素材の竿に較べると短いが重く、非常に調子の硬い、極端な先調子のものとなっている。

この漁で用いられる竿は、先述のように自然竹に特段の加工を加えたものではないため、操漁中に折れることが良くあった。折れる部分は、竿先から２から３節目あたりが多く、竿を上げる時によく折れた。先調子の竿であるから先が折れてしまうとただの棒のようなものであり、弾力がまったく無くなるため、アユが掛かったときにショックで鈎素が切れてしまう。このため、竿先が折れたときには応急で修理しなければならない。

修理の方法は、折れた部分の先と元をキリダシでそれぞれ斜めに切り落とし、竹の中心にマッチ棒や柳の枝を芯として差し込み、切り口に接着剤として弁当の飯粒を塗り付け、糸でグルグル巻にして固定した。応急修理と言っても、実際にはこのまま１シーズン使うことになる。根元近くの太い部分が折れることもあるが、この様な場合でも、基本的には同じ様な修理を施し使い続けた。

②　道糸（図－４）

道糸は、オヤイト、ミキイト、ドービキ等と呼ばれている。ナイロンテグスが普及してからは３号位のものを用いていた。それ以前はイカイトと称するタコイト（木綿糸）を硬くしたような糸を使っていた。

③ オモリ（図－3）

船を用いたアユカケ漁の仕掛の大きな特徴は、大きなオモリを用いることである。オモリは、道糸と、ダイ（後述）と呼ばれる、オトリ回りとの間に付けられる。

オモリの役割は、急流によりオトリが浮かされないようにすること。急流の中でおとりの負担を軽減し、動きやすくすることにある。従って、ポイントの深さや流速に合わせて、オモリの大きさを使い分ける必要がある。深ければ深いほど、速ければ速いほど大きなオモリを用いる。

特に流れの激しいポイントの場合は、オモリをオトリの鼻先に付けて沈める場合もある。

オモリの製作方法は、竹の筒に鉛を溶かし入れて棒を造り、これを適当な長さに切り、叩いて丸くし、途中に刻みを入れてチチクビとする紐を挟み込み、形を整える。鉛を溶かし込む竹は枯れた竹（良く乾燥した竹）を用いる。青竹には水分が多く含まれるため、鉛を入れたときに爆発することがある。

この様に自製するほかに、市販の耳付きのオモリを用いることもあった。

④　オトリ回り（図－４）

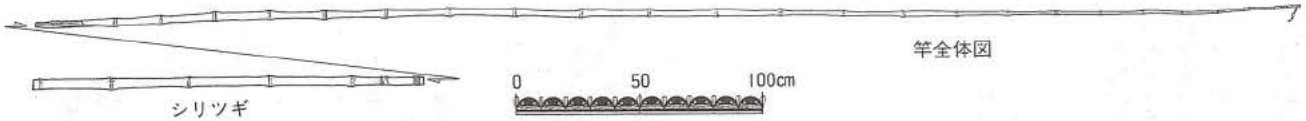
オモリからオトリまでの間をダイと呼称している。この役割は、オトリを仕掛に着けるとともに、オモリを支点としてオトリを泳がせることにある。

この部分は図で示したように結び目が多く、素材には柔軟性が求められる。このため、かつてはホンテグスを用いることもあった。

ダイは、オモリを着けるためのチチワの部分、オトリの泳ぎ分の長さの糸と、オトリを付けるためのツボと呼ばれる小さなチチワと、これに続く鈎素を付けるためのチチワの部分からなる。

ダイの部分が長いとオトリは良く動きアユも掛かりやすいが、その分オトリが弱りやすくなる。ダイの部分が短いと、オトリは楽であるが、オトリがオモリに絡まりやすくなる。このため、ダイの長さはオトリの大きさや、水深、水流等の要素を勘案して決めることになる。

オトリの付け方であるが、現在では鼻環（はなかん）と呼ばれる金属の輪を用いて仕掛に付けることが一般的であるが、関津の場合、図－７に示したように、オトリの鼻孔に木綿針で木綿糸を通し、これを先述のツボと呼ばれる小チチワに結び付ける。この方法はオトリの付け方としては初現的な形態である。



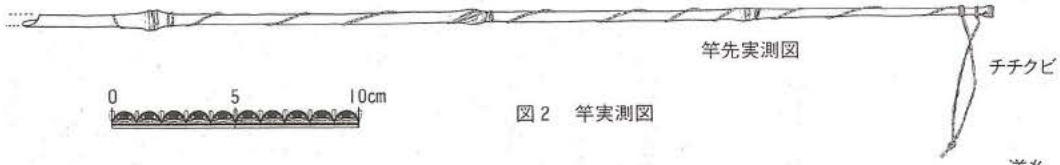


図2　竿実測図

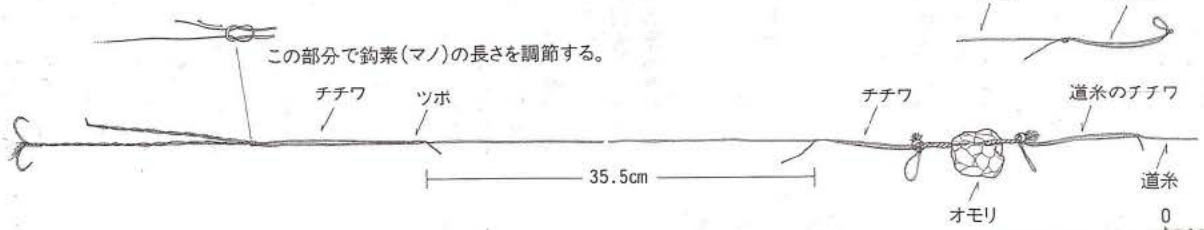


図4　オトリ回り実測図

図5　鈎素(マノ)実測図

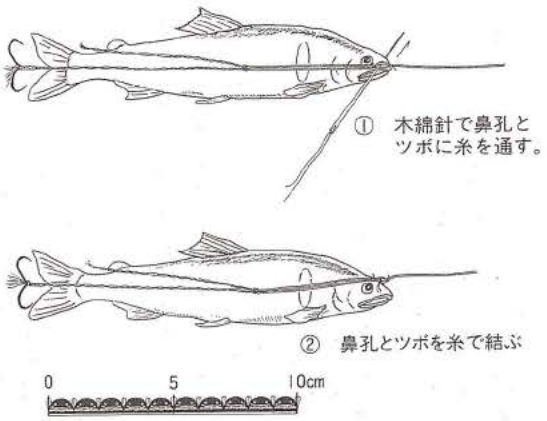


図7　オトリの装着

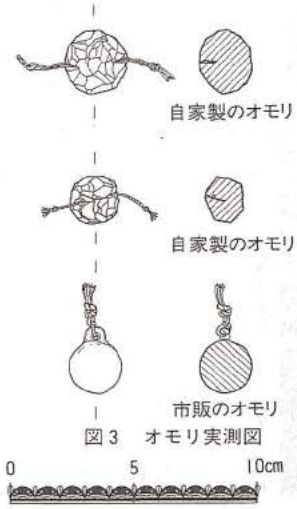


図3　オモリ実測図

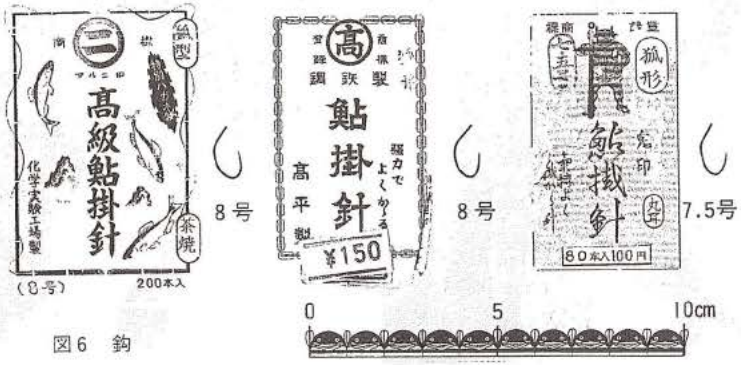


図6　鈎

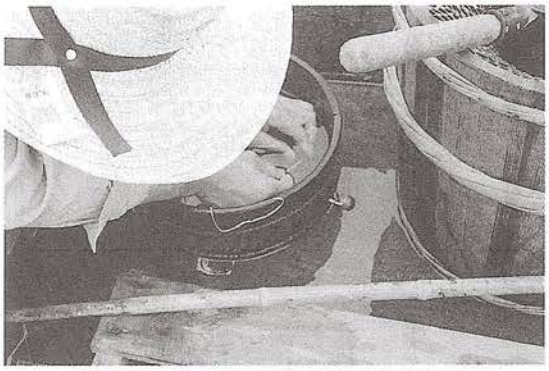


写真２　オトリの鼻孔に木綿針を通す

写真３　オトリとツボを結び付ける

⑤　鈎素（図－５）

通常の釣りにおいては、鈎素は細ければ細いほど良いとされているが、友釣りの場合は、鈎をオトリの尾の位置に定位させるためにある程度の硬さが必要であるとされ、ごく近年までテトロン系の硬い繊維が用いられていた。(ただし最近では逆鈎の使用が一般化したことと、体当たりするアユへの鈎素の絡み付きが、アユに鈎が掛かる要件であるとの考えから、柔軟性のある糸が鈎素として採用されてきている。)

ここで紹介するアユカケにおいては、糸の張り（鈎が立つ）と水切れが良いことから、鈎素にはマノ（馬の尾の毛）を２本よりしたものを用いていた。馬の尾は、テトロン糸が普及する以前は、友釣りの鈎素として全国的に用いられていた。

マノには、断面が平たい（長方形）のものと、三角形のもの、円形のものとがある。平たいものは撚りを入れた時にすぐ切れてしまうので使えない。三角形のものは辛うじて撚りを入れることができるが、岩に当たったりするとすぐに切れてしまう。鈎素として使えるのは断面が円形のものである。また、毛の太すぎるのも良くない、さらに生きた馬から採ったものでないと弱くて使えない。

マノは１本の毛を半分に折り、撚りをかけたものをたくさん造っておき、必要に応じて鈎を結び付けた。

⑥　鈎（図－６）

鈎は、市販のカエリの無い掛け鈎を用い、先述のマノに２本背合わせの蝶型に仕上げたものを用いた。マノと鈎は、絹糸をほぐして嘗めて湿らせたもので巻き付けた。絹糸をそのまま用いると、糸の断面が丸いため、滑って固く巻けないためである。ほぐして湿らせると糸がテープ状になり巻きやすくなる。

用いる鈎の大きさは７分半（7.5号）～８分（８号）を主に用いた。８～９分では大きすぎて魚が傷み値が下がる。ただし、漁期の終わり頃で、魚体も大きく皮も固くなった頃には大きな鈎を用いる。反対に若アユの頃は６分～７分の小さな鈎を用いた。

以上説明してきた各部を連結するとアユカケの仕掛となるわけであるが、仕掛の全長は竿の尻（手元）にオモリが位置するぐらいの長さとした。通常の友釣りでは竿尻より１m～1.5mほども仕掛を長くとることと比較すると非常に短い仕掛である。

２．アユカケ漁の技術

前記の仕掛を用いたアユカケ漁の技術について記して行く。

①　アユを掛けるまで

アユカケ漁に用いる船をアユカケ船といい、琵琶湖水系で用いられている他の木造船とは多くの点で、異なる特徴を持つものである。(詳しくは、琵琶湖和船研究紀要11号「瀬田川のアユカケ船－大津市関津町－」平成６年10月：琵琶湖和船研究会を参照されたい。)

アユカケは、船のトモのハリに腰を掛けて、竿を流れに対して直交もしくはそれに近い角度に出して行う。流れに平行（竿先を下流に向ける）して竿を出すシモザオはしてはいけない。シモザオで使うと、アユは掛かると下流に逃げるため、水流による力も加わり、竿の弾力を活かすことが出来なくなり、いわゆる「竿が伸(の)された」状態となり、鈎素が切れたり、アユの身が切れたり、最悪は仕掛が切れたりすることがある。この様な状態を「アユに負ける」ともいう。アユの背に掛かったときはまだ捕ることもできるが、腹に掛かったときには、水流をまともに受けるのでたいていはバラしてしまうことになる。

この漁のポイントは、川底に岩が多く、複雑な流れのある所で、水深としては1.5m前後が最適で、２ｍぐらいまでは狙うことができる。ただし、余り深いところは掛かりにくい。

船とポイントの距離は、下流に、仕掛の長さ（竿＋道糸）の半分ほど離れた所から始め、後述するように徐々に上流を狙う。ただし、船の真下は狙うことがで

きない。この長さ以上の下流のポイントは道糸に余裕がないため、アユが掛かったときに、仕掛の弾力を活せないので適当ではない。

ポイントにアユを沈めたら、アユの掛かるのを待つ。この際に肝要なのは、オトリを静止させずに常に動かしているということである。アユは縄張りへの侵入者に対して撃退行動をとる訳であるから、アユに対して侵入者を気付かせなければならないから、オトリを目立せる必要がある。このため、竿先を10cm程上下させたり、前後に引いたり、押したりの動きを繰り返す。これでもアユが掛からなかったら、30cmほど上流にオトリを引き上げ、前と同じ動きを繰り返し、アユの掛かるのを待つ。これを3回ほど繰り返したら（約1m移動）シリツギを抜いて竿を短くして同じことを繰り返し、更に、竿を短く持って同じことを繰り返す。次に座る位置をヘサキの方に移動したり、船そのものの位置を動かしたりして、広い範囲を狙う。

オトリを降らせたいときは、ちょっとオモリを川底から上げておけば、仕掛全体が水流に押されて下流に移動する。

竿は、水平よりやや下方に構える。竿の手元はできるだけ柔らかく握り、とっさの変化に対して素早く対応できるように心がける。オトリが自ら動くのを感じたら、この時は、アユに追われて逃げているときなので、竿先を水面近くまで下げ、糸を送り込み、オトリが自然に逃げるように操作する。

オトリの近辺にアユが居れば、たいていは短時間で掛かるが、アユがいるのに掛からない時（水温や水流その他の要因でアユの追いが鈍い時）もある。この様なときは、同じポイントを気長に攻めることもコンスタントな水揚げを確保するためのこつである。

アユが掛かったならば、仕掛の弾力を活かして水面までアユを上げ、道糸を手で取り、オトリと掛かったアユを一緒にオトリザラ（オトリダライ：図－8）と呼ばれる浅い桶に入れる。オトリザラにはあらかじめアユの背が少し出るぐらいの水を張っておく。アユを取り込んだ際に、オトリの様子、仕掛の様子を観察し、異常がなければ再びポイントに仕掛を投入するが、オトリが弱っているようであればオトリの交換をし、仕掛の具合が悪ければ補修や交換を行う。特に、ハリ先が鈍くなってしまったときは、砥石で研いで鋭くする。

② オトリ

次にオトリについて記す。この漁の最も大きな特徴は、活きたアユをオトリとして用い、これで他のアユを漁獲するということである。当然のことながら、アユカケ漁にはオトリが欠かせないわけであるから、漁の始めにはオトリを確保する必要がある。

漁期の間は、自分で捕ったアユのうち元気の良いもの

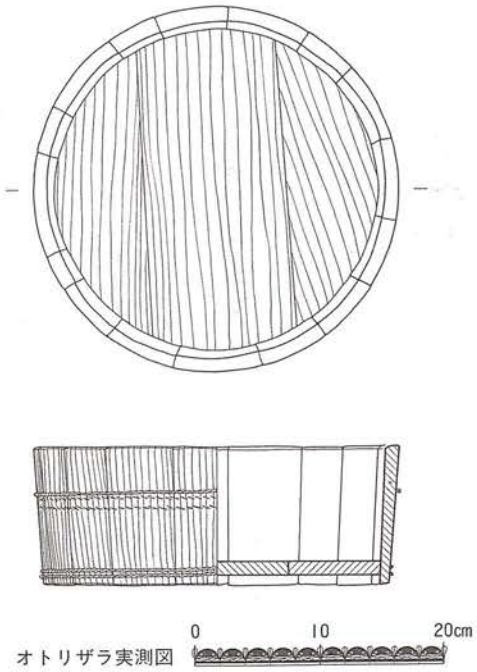


図8　オトリザラ実測図

写真4　掛ったアユとオトリをオトリザラに入れる

を数匹マルオケ（後述）で活かしておき、これを翌日の漁のオトリとして用いるが、一番最初の漁や、天候等により、漁の期間が開いてしまったような際には、スガケによりオトリを捕る。この時のスガケの仕掛は、産卵期ののぼりアユを捕るときのものよりも、鈎数の少ない、仕掛の長さも短いもの（竿尻から鈎を3本分垂らすぐらい）を用いる。定着期のアユのポイントは岩だらけの処であり、このような処で、しゃくるように仕掛を操作する必要があるため、仕掛は短い方が扱いやすい。

スガケの鈎は道糸から枝糸を出してこれにカケバリを蝶型に組み合わせたものを用いる。これに対して、道糸にカケバリを直結する方法もあるが、これは鮎が掛かりやすいものの、掛かった鮎が落ちやすい。

スガケの他にトアミでオトリを捕ることもできるが、

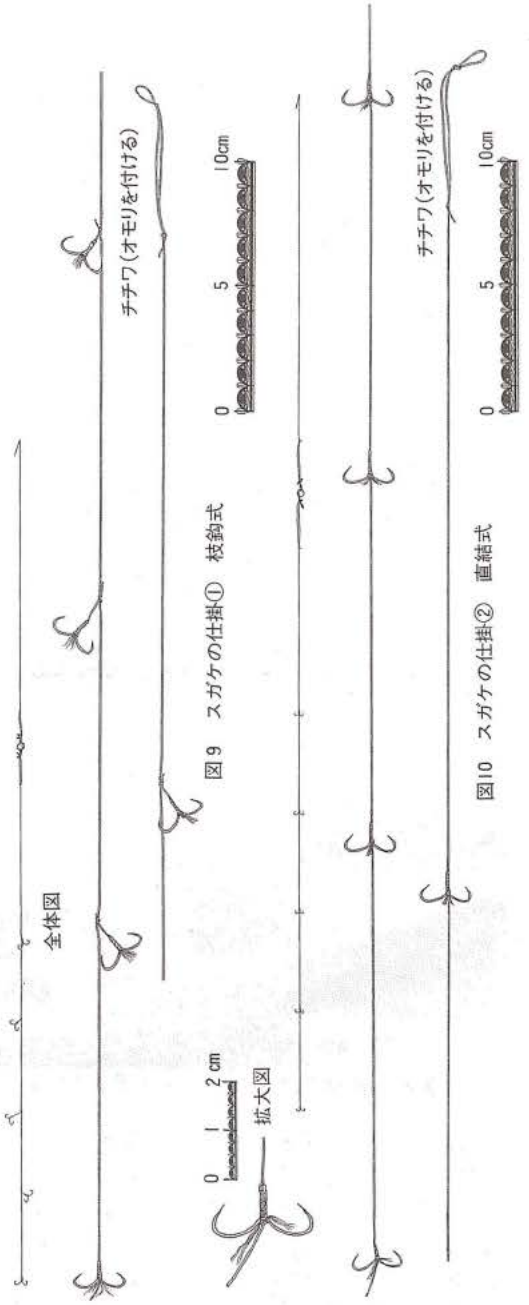


図9　スガケの仕掛①　枝鈎式

図10　スガケの仕掛②　直結式

図11　スガケの鈎

投網で捕った鮎は、網目にすれて魚体が傷み、長く活かしておくことができない。このため、網で捕ったアユをオトリとして用いるには、やや難がある。

オトリは元気なほどアユの掛かりは良い。元気がなくなり泳がなくなると、極端に鮎の掛かりが悪くなる。オトリが弱ってくると、竿先がオモリの重さだけを受けてしなったまま動かなくなる。生き物の動きが竿先に伝わらなくなるからである。この様な状態となったらオトリを替えなければならない。目安としては、5～6匹アユを掛けたらオトリを交換した。現代の友釣りでは、オトリを泳がせることを重視するためアユが掛かる度にオトリを交換することが多いが、これに較べると交換のタイミングはかなり遅い。

仕掛へのオトリの付け方は先に触れたが、オトリと鈎の位置関係は、オトリの尾の先端を結ぶ線上に鈎の根元が来るようにセットする。アユの追いが鈍い時は鈎をやや上げて（鈎素を短くする）セットする。

アユカケでは、動きまわる野生のアユが掛かるわけであるから、アユの色々な部分に鈎が掛かることになる。鈎の掛かる部分により、アユに与えるダメージが大きく異なる。従って、鈎の掛かる部分によっては、このアユが次のオトリとして使えるか否かが、変わってくることになる。鈎の掛かる部位と、オトリとしての使用の可否との関係は以下のようになる。上口に掛かった場合は、オトリとして使用可。下口に掛かった場合は、使えなくはないが余り良くない。胸に掛かった場合は、殆どの場合即死状態で使えない。腹に掛かった場合は、傷の深さにもよるが、内臓に傷の付いたものはすぐ死んでしまうので使えない。尾に掛かった場合は、使える。背に掛かった場合が、最高。

鈎素の長さにより、アユの掛かる部位をある程度調整することができる。前述の鈎の位置が、経験的に採用された、最も背掛かりの得やすい位置関係である。

アユの追いの良いときは背掛かりが多いが、追いの鈍い時は口掛かりが多くなる。

漁の最初のオトリでアユが掛からないような時はたいていその日の漁は良くない。一回目は自分が心に決めた最良のポイントで漁をする事が多いためである。オトリが弱ればアユが掛からないわけであるから、元気の良い背掛かりのアユをいかに早く手に入れるかが、その日の漁を左右することになる。そのため、最初の1匹を掛けるためにこれはと思うポイントをつまみ食い的に攻めることもある。　以下255号に続く

文責：大沼芳幸
（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課）